

先輩学芸員にきこう！

インタビュー企画
倉敷市立美術館
主幹(学芸員) 杉野 文香さん

(1頁より続き)

展覧会の開催中とそうでない時とで仕事に違いはありますか。
独自企画の特別展は始まるまでに、作品選定・出品交渉、ポスター作成などの広報、図録・パンフレットなどの作成、開会式の準備、作品借用・展示と様々な業務があります。会期中は、解説会や関連イベントの準備と実施、展覧会が閉会すると撤収作業、作品返却で業務が終了します。

休日ほどのくらいありますか。休日を研究にあてる場合も多いのでしょうか。

週休2日で祝日も休みの扱いになりますが、交替での勤務やイベントの実施などで休みは不規則です。直接の業務とかかわりが少ない研究ということになると、通常の勤務時間内で時間を取ることは難しいです。

仕事中、研究にあてる時間はどのくらいありますか。

勤務時間中は、担当業務を実施するための調査・研究が主になるので、広い意味での研究はなかなか時間を取ることができません。

作品の取り扱い方法について、どのように身につけましたか。

在学中には、博物館実習程度で、取り扱いについては全く習得できていません。実際に美術館で勤務し始めてから、先輩学芸員に教えてもらいながら学びました。初めは作品に触れるというだけで大変気疲れしました。

展示作品と収蔵作品を保管する上で、何に特に気をつけていますか。

展示作品に観覧者が触れるなどして破損することがないように、展覧会場の監視員の方々の意見も聞きながら、足止めを置いたり観覧上の注意事項のパネルを掲示したりします。収蔵庫では、額装されていない素描など、保存用の専用の紙を挟んで箱にいれるなど適正な状態を保つようにしています。

今まで担当された展覧会の中で最も印象に残ったのは？

巡回展ですが「モネ『睡蓮』と今日」という展覧会で、修復家の岩井希久子さんにお会いして、モネの作品を基に作品の修復についてのお話を伺えたことが勉強になりました。

展覧会を開催するにあたってどのくらいの期間を要しますか。

事業予算は年度単位なので、具体的に準備を始めるのは1年前くらいからです。

なぜ次々と新しい展覧会の構想を思いつくことができるのですか。

何を重視して展示を構想しますか。

自分がアイデア豊富な方ではないので、苦労しているところです。常に調査・研究して新しいテーマを思いつかなければいけないと思っています。展覧会をご覧になる方それぞれが、何か発見があるような展示内容・構成にしたいと思っています。

予算や期間に限られる中、来館者の興味をひきつける展示等をつくる際の工夫や苦労にはどのようなものがありますか。

あまり知られていない作家や作品については解説パネルなどが必要になりますが、言葉だけ読んで納得していただくのではなく、作品をじっくり見てもらえるような解説文でありたいと心がけてはいますが、大変難しいです。

子供たちにわかりやすく伝える工夫などありますか。

毎年行っている市内の小中学生の作品展に来館する子どもたちに、コレクション展を観覧してもらうため子供向けの解説パネルやワークシートを作成するなどしています。

巡回展の場合、それぞれの学芸員が共同で企画しますか。

共同企画の場合は、作品の選定などを各館担当の学芸員で協議した上で、図録の作成や、出品交渉、借り出しなどを分担して行うことになります。

全く専門外の分野の展示を任せられることはありましたか。

彫刻や写真、書など専門外の展覧会を担当したことがありますが、作品の取り扱いや展示については、所蔵する美術館の方や他館の担当者、以前に担当した経験のある職員に指導を受けてなんとかしのぎました。

学芸員として働く上で最も大切なことは何ですか。

高い専門性をもとに、一般の方々に作家や作品についての意義を広く理解していただくことだと思います。

博物館・美術館について

昔の美術館と今を比較して変わった点がありますか。

私が美術館に勤め始めた頃と比べて、展覧会の開催だけでなくワークショップや鑑賞会など教育普及事業を行うことが当たり前になりました。一方で、展覧会の観覧者数は増えていません。作品を鑑賞していただくためのきっかけづくりになるような、普及活動を企画していきたいです。

博物館と観光は強く結びつくべきだと思いますか。

その博物館の設置目的や立地条件によっても異なると思います。倉敷市立美術館の近くには美観地区という観光地があり、大原美術館というとても有名な美術館もあります。観光客を積極的に取り込むというよりも市立の美術館として、地域の美術作家や作品を調査・研究し、紹介していくという役割を果たす中で、注目される美術館となっていければと思います。

博物館の基本的機能の内、今一番重要なものは何ですか。

倉敷市立美術館は開館して30年以上たちますが、これまでに収集し、おそらくこれからも増え続けていくであろう美術資料の保存です。場所や設備の拡充の問題をはじめ、何をどのように後世に伝えていくのが課題です。

参加型の手法をどのように取り入れるべきだと思いますか。

観覧者が能動的に美術作品とかかわることは大変重要なことだと思います。しかし鑑賞や創作など美術館での体験がすぐに結果として現れるものではないので、これが有効な方法というのは難しく、模索している段階です。

「博物館」と「美術館」のどこに違いを最も感じますか。

自分の個人的な思いですが、「博物館」はなんでもあり、美術も扱うことができるのに対して、「美術館」は美術のみを扱う、あるいは「美術館」で扱うものは美術であるということです。では美術とは何であるのか、という問いからはのがれることができないと思っています。

メッセージ-学生のみなさんへ-

皆さんは、学芸員資格取得のために私が学生だったころよりも多くの科目を履修され、さまざまな理論・知識を身に付けて、もちろん専門分野の研究にも励まれていることでしょう。人と物をつなぐ場である博物館を、活気のあるものにしていくためには、基本を踏まえた上で柔軟な発想と行動力が必要になると思います。学芸員となった時には、新しい力で事業を展開してってください。

09 September. 2017 学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course for Prospective Museum Workers, Faculty of Letters, Okayama University

編集・発行: 岡山大学文学部学芸員課程 (編集 光本 順)
発行日: 2017年9月13日
文学部学芸員課程 Web Site
http://www.okayama-u.ac.jp/user/pmw

contents

先輩学芸員にきこう！
倉敷市立美術館
杉野 文香さん…………… 1・4
特集 ユニバーサル・ミュージアムを考える
新納 泉…………… 2・3
学生コラム 思い出のミュージアム
長門 巧…………… 3

「先輩学芸員にきこう！」は2017年度博物館概論の授業にて、受講生が学芸員に関する理解を深める目的で行っています。5回目となる今回は倉敷市立美術館の杉野文香学芸員に受講生からの質問にこたえていただきました。特別展「二人のHIROSHI 一 貝原浩・永岡博 一」のご担当でお忙しい中、丁寧な回答をいただきました。「特集 ユニバーサル・ミュージアムを考える」は、2017年7月12日開催の文学部学芸員課程ランチタイム企画の内容をもとに、報告者の新納泉教授より寄稿いただいたものです。資質や姿勢にかかわる普遍的テーマです。「学生コラム」では学生の貴重なミュージアム体験を共有したいと思います。

(文学部准教授 光本 順)



ギャラリートーク風景

インタビュー企画
倉敷市立美術館
主幹(学芸員) 杉野 文香さん

プロフィール

1965年 岡山県生まれ
1987年 山口大学人文学部卒業
1991年 岡山大学文学研究科修了
倉敷市立美術館には1990年から非常勤嘱託学芸員として、1994年から学芸員として勤務。近代洋画を担当

学芸員になるということ

学芸員になるまでの流れについて教えてください。

大学院在学中に、倉敷市立美術館の嘱託職員として学芸員の仕事があることをご紹介いただき働き始めました。その後、学芸員採用試験を受験して採用していただきました。

学芸員になると思ったきっかけは何ですか。

美術を鑑賞することに興味があり、美術史を専攻しました。大学で学芸員という職業があることを知り、美術と人を結びつける仕事ができればと思い志望しました。

学芸員向きの人物像などありますか。

美術について言えば、作品を作るのも、所有するのも、見るのも人間です。作品だけでなくそれに係わる人との関係性が重要になりますので、社交性が必要と言われたことがあります。

学芸員になる上で大切なことは何ですか。

専門的な内容をわかりやすく伝えようとするための、言葉や文章などの技術を身に付けることが大切だと思います。博物館や専門領域が好きだという理由だけでめざして良いものではないです。

そうした思いから、その良さ面白さを多くの人たちに知って

もらいたい、体験してもらいたいという気持ちが生まれてくれば、仕事につながると思います。

学芸員になるために学生時代にすべきことは何ですか。

学生の時にはなんにでも興味を持って、広く浅くいろいろと経験してみてください。

美術館が欲しい人材とはどのようなものですか。

大変抽象的ですが、美術あるいは美術館に人々の意識を向けさせることのできる人だと思います。

学芸員の仕事とは

学芸員になる前と後で学芸員や博物館に対する考えなどに変化がありましたか。

勤務する前は、作品に係わる本当に狭い範囲でのことしか考えていませんでしたが、作品の保管や展示技術など様々な知識が必要なのだとわかりました。

学芸員のどのような活動にやりがいを感じますか。

展覧会をご覧になったお客様から、具体的に作品や展示構成についての意見をうかがうことで、自分の意図していることが伝わったことが確認できたり、まったく違う見方をされていることに気づくことが面白いです。(続きは4頁へ)

先輩学芸員にきこう！

ユニバーサル・ミュージアムを考える

新納 泉 社会文化科学研究科・文学部教授

目の見えない人たちに博物館を楽しんでもらうにはどうしたらいいのでしょうか。点字の資料？ さわれる展示物？ 凹凸のある館内地図？ もちろん、そうしたものがあってもいいことにはないのですが、なくてもできる工夫が大切。まずは基本にもどって考えてみましょう。

■新しい時代をむかえた博物館

体の不自由な人たちにも博物館に来てほしい。そんな気持ちに支えられて、これまでもさまざまな工夫がなされてきました。しかし、「障害者差別解消法」が2016年4月1日に施行され、博物館は新しい時代に突入しています。国民は「障害を理由とする差別の解消の推進に寄与するよう努めなければならない」とされ、国や地方の行政機関等や事業者には、そのための合理的配慮を行う環境の整備が求められています。博物館ももちろんそのひとつです。合理的配慮は、恩恵ではなく義務または努力義務となったのです。

そうした動きのなかで、各地の博物館で新しい動きがでてきています。なかには、戸惑いの声もあるようですので、ここでは、目の見えない人たちの博物館利用を例に、できるだけ利用者の立場に立って、いくつか考えてみたいと思います。

■さわって楽しむ博物館

ある海外のサイトで、＜目が見えない人の多くは博物館が好きではない＞という記述に出くわしました。理由は、＜博物館は視覚にたよるところが多いから＞ということです。海外でも状況は同じなのだと思われ、納得させられたのですが、それでも、工夫をしているところはあります。スペインのプラド美術館では、2015年の前半に、「プラドにタッチ」という変わった展示を行っています。モナリザをはじめとする6点の絵画を、3D技術を駆使してさわってわかるように複製して展示したのです。目の見えない人たちは、音声ガイドに従って実物大の複製をさわっていきます。これなら私もさわってみたいと思うのですが、そういう人のために、音声ガイドだけでなくアイマスクも貸してくれるというのが面白い試みです。ほかにも、「タッチ・ツアー」を実施しているところは少なくないようです。大英博物館では、エジプト彫刻の展示室で、さまざまな石製の彫像にさわることができるようです。ツアーは週4回で要予約。オーディオガイドは、自分のスマートフォンで聞いてくださいとのことでした。

■感動の博物館体験1

生後まもなく視力を失ったKさんに、楽しかった博物館の例を聞いてみました。Kさんもやはり博物館は、普段は苦手だといいます。ひとつは、ドイツのベルリ

ンの壁博物館。チェックポイント・チャーリー・ミュージアムという名前で、東西ドイツを隔てた壁の検問所付近につくられています。近くでは残された壁にさわることでもできて、壁で隔てられた人びとの悲劇の数々を聞くこともできたのですが、圧巻は博物館のなかに展示された乗用車でした。銃撃されても検問所を突破できるように、車の内側にはコンクリートの板を貼りつけていました。銃弾の跡や、なかに手を入れてコンクリートの板をさわることができて、実物のもつ迫力に圧倒されたということです。

■感動の博物館体験2

もうひとつは、たまたま訪れた、滋賀県蒲生郡日野町の近江日野商人館です。近江商人は日本三大商人のひとつといわれ、そのうちの日野商人は、木製の椀や医薬品を関東一円にまで売り歩いていた。そうした豪商の屋敷を利用した、よくある展示施設なのですが、違うのは館長さんの圧倒的な学識と、何を聞いても興味深く答えていただける説明のうまさ。知識を押し付けるのではなく、利用者の関心に応じて理解を深めさせてくれる対応は、すばらしかったとのこと。さらに、目が見えないということで、面白い展示物を取り出してきてさわらせていただいたのも、非常にありがたかったようです。

■求められているもの

目の見えない人への対応というと、すぐに点字のリーフレットやさわれる案内という方向で考えてしまいがちですが、この二つの例でもわかるように、大切なのはその博物館がもっている魅力を、小手先ではなく、いかに感動的に伝えられるかということではないでしょうか。それを実現できるのは、やはりツアーや解説なのだと思えます。それも、視覚にたよらない説明。ガラスの向こうに何がありますという説明が続くのでは、だんだん苦痛がついていきます。目の見えない子どもたちの修学旅行で、バスガイドさんから、右に見えますのは〇〇でございます、次に左に見えますのは・・・と案内されるのを「市中引き回しの刑」と呼んだという目の見えない生徒の話を思い出しました。結局、見えない人たちは、「自分たちも楽しめる博物館」ではなく「自分たちが楽しめる博物館」を求めているのだと思えます。見える人たち本位の博物館を、なんとかわかるようにするのはなく、たとえひとつのツアーでもよいから、見えない人本位の博物館を工夫してほしい。もちろん、それがいちばん労力を要することではあるのですが。

■二次元と三次元

目の見える私たちは、頭の中で二次元と三次元の転換を、何の苦もなく行っています。写真を見れば空間をイメージし、立体物を見ればそれを記憶して絵に描くことができます。しかしこれは、目の見える人たちに特有の認識と記憶の方式であって、とくに生まれつき目の見えない人の場合は、三次元のもは二次元に転換せずに、三次元のままで記憶することが多いようです。そこでよく聞くのは、＜さわる地図はわかりにくい＞という声です。一部の特別な訓練を受けた人や中途失明の人たちは別として、通常は地図というものを使う習慣がほとんどないので、いくらさわっても読み取れないことが多い。また、多くの地図は複雑すぎてわからず、日常的には、直進・左折・右折を繰り返す点と線が繋がったイメージが地図の役割を果たしているようです。さわる絵本も、多くの場合はわかりにくいということです。この二次元と三次元の話は、目の見えない人たちの博物館利用を考える上で、キモとなるのではないかと私は思っています。

■レプリカの役割

その点で、レプリカは便利です。レプリカであれば、二次元との転換の問題がありませんから、目の見えない人たちにも比較的わかりやすいと思います。それでも、私たちは展示物がレプリカだとわかると、少しテンションが下がってしまいます。目の見えない人たちも、とりわけ触感を大切にしますから、さわるなら実物に勝るものはないだろうと思います。それでも実物

をさわることには限界がありますから、レプリカは重要です。さきほどのスペインの名画の場合は、新しい手法で絵画に凹凸をつけたものでした。1点10万円あまりで制作できたということですので、着色もされているので意外に安いという気がします。3Dプリンタの活用も、これから大きな役割を果たすことになるでしょう。

■新しい一歩を

目の見えない人たちへの博物館のサービスは、実質的には始まったばかりで、まだ試行錯誤の域を出ていないのかもしれませんが。点字や触地図などの外形的なところに関心が行きがちですが、まずは、目の見えない人たちと共有できる、その博物館の魅力を確立することから始まるのではないのでしょうか。そうした魅力を伝えるツアーが実施されるなら、参加したいという人はそれなりにいるような気がします。



ランチタイム企画でのトーク風景

思い出のミュージアム // 博物館情報・メディア論の一環で作成したコラム記事

昨年度、グローバル・パートナーズによる異文化体験プログラム中に訪問した博物館のうちの1つである、シンガポール切手博物館を紹介します。

切手のみという点に興味を抱いた事に加え、徒歩10分圏内にシンガポール国立博物館やナショナル・ギャラリー・シンガポールといった、数多くの文化的施設が立ち並んでいるという点からこの博物館を訪問しました。

2階建ての館内には、動物が描かれた切手とそれに対応した動物の鳴き声が聞ける仕掛けや、ハンドルを回すことで切手の時代での移り変わりを目にする仕組みなど、子どもでも楽しめるような展示が見受けられました。一方で、紹介文と共に世界各国を表現する切手を国ごとに数十枚ずつ保管した、まさに切手博物館、といった展示室や、切手のデザインからシンガポールの民族のルーツを辿った切手を展示したりするなど、やや高度な展示も見受けられました。

展示について意外だったのは、切手にとどまらず、民族衣装や住居といった関連資料も豊富な事と、音を用いた仕組みが数多く見られた事です。ネタバレになるため詳細は控えますが、先述した1階にある動物の切手の展示室と、2階にあ

る現代のシンガポールの発展と課題に関する切手の展示室には、聴覚や視覚を楽しませる仕掛けがあり、つい長居をしてしまいました。

様々な仕掛けの他にも、シンガポールの記念切手をスマートフォンの壁紙として配信する機械など、展示方法についても非常に参考となるような博物館でした。

(理学部地球科学科 長門 巧)

